哺乳類科学　61(2)：331，2021　DOI: 10.11238/mammalianscience.61.331
©日本哺乳類学会


書　評

## 『里山に暮らすアナグマたち：フィールドワーカーと野生動物』

金子弥生［著］

（東京大学出版会，2020 年 11 月，248 頁，3,800 円＋税）

本書のおもな標的は次世代であり，語り掛ける内容は，国内外におけるアナグマ類を中心とした食肉目動物の行動観察を記録・分析をされた結果を基軸に，フィールドワークの面白さ・厳しさである．本文記述では，科学論文のように著者・年代が括弧内に明示され，巻末の引用文献一覧で確認できるようになっている．そこに記された筆頭・責任（連絡）著者となる多数業績は，（修士・博士号の）学位を得たにも関わらず公表しないことや，やらされ感満々の高校生発表の現状などに対する，著者の自信に満ちた痛烈な批判に根拠を与えている．

評者の立場は，野生動物などの寄生虫病の診断・疫学で，かつては野外での作業もかなり行ったつもりであった．もっとも，今日では，正真正銘，本書著者が定義される専らラボワークである．以前の作業についても，本書コラムで示されたフィールドワークとは何か，フィールドワーカーとはどういう人々なのかなどを読み解くと，とてもではないが，フィールドという語を安易に使ってはいけないと猛省している．

また，行動研究で必須な不動化や外来種の安楽死などの対応では，著者の真摯かつ謙虚な姿勢が見られるのだが，そのような記述の合間に，評者が知る複数の獣医師も登場していた．うち 1 人は元ゼミ生・指導院生であったように，評者のもとには獣医学科に所属しながら，野生動物を志向する者が集まる．次回からは，そういった者には，黙ってこの本を差し出そう．

しかし，あくまでも評者の立場からではあるが，少々，残念なことがある．本書序文に「起こりうる諸問題（感染症・・・による影響）にも対応するシステム構築」について触れていた．たとえば，第 9 回国際哺乳類会議 IMC9 でも，英国産ヨーロッパアナグマ *Meles meles* におけるウシ型結核菌 *Mycobacterium bovis* に関する報告があったが（Delahay et al. 2005），この結核問題は，かの国では家畜衛生担当者・動物愛護団体・動物行動学者などを巻き込んで，激しく論議中であるときく．著者は，せっかく，その渦中（？）に飛び込んだのだから，詳らかな報告を期待したが，言及されていなかった．また，ニホンアナグマ *Meles anakuma* は，古来，野性味のある食材として愛され，もちろん，今日のジビエブームでも注目されている．畢竟，公衆衛生学的な面でも話題が出てきそうだが，このような面にも脱線してくれてはいない．改訂版での補遺を楽しみにしたい．

### 引用文献

Delahay, R. J., Smith, G. C., Ward, A. I. and Cheeseman, C. L. 2005. Options for the management of bovine tuberculosis transmission from badgers (*Meles meles*) to cattle: evidence from a long-term study. Mammal Study 30 (Suppl.): S73–S81.

浅川満彦（酪農学園大学）
✉askam@rakuno.ac.jp